

鈴木有郷牧師説教

4/11/10 わたしは主を見ました！ ヨハネ20:11-18

マグダラのマリアは墓の前で泣いていました。それまで心から慕っていた先生が、何と十字架にかかって死んでしまったのです。おまけに、イエスの遺体は陰も形もなく消え去ってしまっていたのです。彼女の絶望と混乱が目に見えるようです。

突然イエスが彼女の前に現れ、「マリア」と優しく声をかけます。畏れにうち震えながらマリアは答えます。『ラボニ！』（先生）

イエスを甦らせた神の力の前にマリアは圧倒されます。人間の言葉は有限で、神の働きを完全に表現することはできません。その有限な言葉を使ってマリアは精一杯自らの驚きを表現したのです。「わたしは主を見ました。」

「わたしは主を見ました。」このマリアの叫びには、いくつかの重要な意味が込められています。

第1. それは、イエスは生きておられる、今私と共におられる、という否定しようのない実感です。イエスは圧倒的な臨在感と迫力でマリアの心を捉えたのです。

第2. それは、神の性格はイエスを通して最も明白に啓示されたということです。イエスは社会から疎外されていた病の人を癒されました。劣等人間と見なされた女性や、社会の厄介者と見なされた子供に優しい眼差しを向けられました。イエスは貧しい者、虐げられた者の味方でした。イエスは彼の下に来るすべての人とパンを分かち合い、食事を共にされました。これらは過去においても、現在においても、将来においても神の意志なのです。

そして第3. それはイエスが死を克服されたということです。死とは単なる肉体的な死だけを意味しません。死とは不正義のことであり、不条理のことであり、死とはいじめであり、仲間はずれであり、虐待であり、憎しみであり、弱い者を足蹴にすることであり、自分さえよければそれでよとする利己主義のことであり、死とは義人が滅び、悪人が栄えるという不条理です。いたいけな子供の命がこの地上から取り去られてしまうことです。

イエスはすべての不正義と不条理を徹底的に拒否されました。そしてそれらの犠牲者を、風呂敷がものを包み込むように、そっと慈しみで包みこまれました。

そして第4. それはイエスこそ私たちが徹底的に信頼できる唯一のお方であるということです。イエスは主なりということです。イエスが主であるならば、わたしたちが信頼を託して常に裏切られるこの世の富、この世の権力、この世の力は主ではないのです。皇帝ネロの統治の下ローマの民が熱狂する競技場で、堂々とライオンの餌食になったキリスト教徒が存在したのはその証しです。

イエスの復活、それは人間を徹底的に変革する力です。イエスの復活、それは常に私たちの日常生活の中で憎しみを和解に変え、不正義を正義に変えるのです。

1945年のクリスマス・イヴ、東京にあるアメリカのある宣教師の家で、数人のアメリカのGIと日本人の若者が、「きよしこの夜」を一緒に歌っていました。4ヶ月前、彼らは互いに殺し合う敵同士だったのです。4ヶ月後、彼らは焼け跡と化した東京でクリスマスの讃美歌を歌っていたのです。

イースターは過去の出来事ではないのです。今現在私たちが人生の旅を歩む中で何回も、何回も起きるのです。

旅人が山道を歩いています。彼は疲れ果て、崩れ落ちるように座り込んでしまいます。天を仰ぐと、山の頂上に一条の光が見えます。旅人は急に元気を回復します。彼は立ち上がると、一步一步力強い足取りで歩きつづけます。

旅人は私です。あなたです。「わたしはイエスを見ました！」というマリアの叫びは山の上の光です。